

肺がん検診の重要性

川口市立医療センター

呼吸器外科

すずき じゅんや
鈴木 淳也



日本の悪性腫瘍(がん)による死亡原因の第1位は「肺がん」であり、年間約7万5千人が亡くなっています。肺がんは早期の段階で症状が現れることはまれであり、症状が現れたときはかなり進行している状態になります。そのため、早期発見には定期的な検査が非常に重要です。

日本では肺がんの早期発見のため、40歳以上のかたを対象に年1回の肺がん検診を推奨しています。肺がん検診では胸部レントゲン撮影を行います。特にたばこの喫煙本数や年数が多いかたには痰の検査(喀痰細胞診)を加えることで、検診精度を向上させることができます。しかし、肺がん検診の受診率は年々増加してはいるものの、男性53.2%、女性46.4%と、残念なことにはまだ低いのが現状です。「症状がないから大丈夫だろう」と検診を受診しないでいると、いざ肺がんが発見された時にはかなり進行している可能性があります。肺がん検診の案内が届いたら、積極的に受診しましょう。また、検診で精密検査が必要となった場合でも、肺がんが確定したわけではないので、速やかに胸部CT検査や気管支鏡検査などの二次検診を受診してください。二次検診で実際に肺がんと診断される割合は2~3%と割合としては少ないと思われるかもしれませんが、そこで発見することで早期治療につなげることができます。

肺がんの治療には手術や抗がん剤、放射線などさまざまなものがありますが、いずれにせよ早期に発見し治療を開始することが何より重要です。当院では近隣の医療機関からの二次検診を受け付けており、肺がんが疑わしいかたの検査、治療を呼吸器外科・内科で連携をして行っています。気になることがありましたらかかりつけ医に相談し、当院の外来を受診してください。

3月は自殺対策強化月間です

自殺は、さまざまな要因が複雑に関係していて、その多くが「追い込まれた末の死」であり、その多くが「防ぐことができる社会的な問題」であるといわれています。厚生労働省では就職や転勤、転居など、生活環境が大きく変動し、自殺者数が増加する傾向にある3月を「自殺対策強化月間」と定め、国、県、市町村、関係機関・団体などが連携し、自殺予防のために取り組むこととしています。本市では「大切な あなたの命は 宝物」をキャッチフレーズに横断幕を駅などに掲示し、普及啓発をしています。



●自殺者数の現状

令和5年中の本市の自殺者数は109人で、昨年よりも25人増加し、自殺死亡率は人口10万人あたり18.03です。全国の自殺死亡率17.27、埼玉県17.84を上回っており、深刻な状況となっています。

●ゲートキーパーをご存じですか？

ゲートキーパーとは、悩んでいる人に気付き、声を掛け、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る人です。特別な研修や資格は必要ありません。誰でもゲートキーパーになることができます。周りで悩んでいる人がいたら、やさしく声を掛けてあげてください。声を掛け合うことで、不安や悩みを少しでも和らげることができるかもしれません。悩みを抱えた人を支援するために、身近な人(ゲートキーパー)の力が必要です。

ゲートキーパーの役割

- 気付き: 家族や仲間の変化に気付いて、声を掛ける
- 傾聴: 本人の気持ちを尊重し、耳を傾ける
- つなぎ: 早めに専門家に相談するよう促す
- 見守り: 温かく寄り添いながら、じっくりと見守る

▼詳細は動画をご覧ください。



※無料(通信費は自己負担)

メンタルヘルスチェックシステム「こころの体温計」

パソコンやスマートフォン・携帯電話からいつでも簡単にこころの健康状態をチェックできます。また、相談窓口も案内しています。



☎疾病対策課 ☎048-423-6748 ㊟048-423-8852

川口市の

官民連携地域情報
ウェブサイト



TRICO Kawaguchi とは

行政の情報だけでなく、地域やお店の情報など、さまざまな川口の情報が集まる川口市公式の地域情報ウェブサイトです。

イベント情報も
チェック



このトリオも
あと1か月...か?
川口市 広報課 職員による
ちょっとだけ! 市政情報番組

85.6 MHz
City Information
FM Kawaguchiで放送中
放送日:平日の10分間...10:00、13:50、17:50、20:00

LINE ID @kawaguchi.city
川口市 公式アカウント

暮らしに役立つ
ぜひご利用ください
きらり川口情報メール



「頂」への挑戦

デフサッカー
日本代表

おかだ たくや
岡田 拓也さん

「音のないサッカー」という愛称の聴覚障害者競技「デフサッカー」。その日本代表でエースナンバー10を背負い、2年前にマレーシアで開催された第4回世界ろう者サッカー選手権大会(デフサッカーワールドカップ)では7得点を決め大会MVPに輝き、日本を過去最高の準優勝に導いた本市在住の岡田拓也さん。今まで努力してきたことが間違いないと実感できた。その目には自信がみなぎる。

デフサッカーとの出会いは大学2年生の時。現デフサッカー日本代表のチームメイトに誘われたのがきっかけだった。「小学生でサッカーを始めてから補聴器をつけて健常者と同じレベルでサッカーをしていたので、デフサッカーの違いに慣れるまでは苦勞しました」。ルールは基本的に一般的なサッカーと同じだが、デフサッカーでは補聴器が装着できないため、「広い視野」を持つことが非常に重要となる。「ピッチ上でのコミュニケーションはアイコンタクトやジェスチャーが基本です。そのためデフサッカーで培った視野の広さは、健常者とのサッカーでも活かされています。今やその広い視野を武器に日本代表には欠かせない存在に。デフサッカーでの活躍が評価され、大学卒業後はパラアスリート雇用で就職。仕事の傍ら日本代表強化合宿や社会人サッカーチームで日々トレーニングに励んでいる。「過去に所属していた社会人サッカーチームではスタメンで出ることができず悔しい思いをすることもありましたが、その反骨心から猛練習をしまし、チームメイトからの助言でメンタルの大切さも学び成長できたと思います。苦い経験を乗り越え結果を出すことで、周りの信頼を勝ち取ってきた。

「自分が誰よりも得点を取るので、チームを優勝へ導きたいです。また、デフリンピックを通して自分たちの人となりも日本中に伝えていきたい」。現在は競技だけでなく、全国各地の学校でパラアスリートとして講演を行うなど、競技の普及活動にも力を入れている岡田さん。選手として脂がのったいま、2年前あと少しで手の届かなかった世界という「頂」を目指し、今日も努力を惜しまず、挑戦し続ける。(孝)

